

坂田寺出土地鎮具



坂田寺の第5次調査で検出された土坑SK160は、8世紀後半に建立された伽藍中枢の建物SB150の北東に位置し、後世に削平された8世紀後半の基壇建物の地鎮遺構と推定されます。SK160からは、土師器・須恵器等の土器類の他、佐波理鉦、銅銭、銅鈴、金箔等の金属製品、琥珀玉・ガラス玉等の玉類が出土しました。

出土した銅銭は全部で291点であり、和同開珎、萬年通寶、神功開寶の3種に加えて、唐の開元通寶1点があります。いくつかの銭貨に植物の可能性のある繊維痕跡が残存しており、一部で撚りの痕跡を観察しました。発掘時には銭貨がいくつかのまとまりで土坑内に散在しており、もとは紐を通した縹銭の状態^{さしぜに}で埋納されていた箇所があったと考えられます。また、平織りの組織が付着した銭貨もあることから、これら銭貨が布で包装されていた可能性もあり、縹銭以外の埋納形態も想定することができます。

土器類はいずれも小型品で、写真の須恵器は平瓶と呼ばれる器種です。外表面に自然釉がみられ、かたちや製作技法等から、猿投窯^{さなげよう}(現在の愛知県)の製品ではないかと考えられます。

奈良時代前期に唐からもたらされた『陀羅尼集經』^{だらにじききょう}には、仏堂建立にあたり、基壇内に七宝(金・銀・真珠・珊瑚・琥珀・水晶・瑠璃)と五穀(大麦・小麦・稻穀・小豆・胡麻)を埋納する作法が記されています。SK160からも、金箔、琥珀、ガラス玉が出土しており、本遺構の地鎮め供養もこれに基づいている可能性があるでしょう。

(都城発掘調査部 木村 理恵)

写真は平瓶・銅銭ともほぼ実物大です。